

婚姻状態と女性の健康

——日本人女性と米国日系人女性の比較から——

学習院大学 玉置えみ

1 目的

パネル調査を含む欧米の先行研究では、無配偶者よりも有配偶者のほうが、健康状態が良好であることが示されてきた。配偶者の存在は経済的安定と精神的サポートをもたらし、健康的な生活習慣の維持を支えることで、個人の健康度を上げるからである。しかしながら、この「マリッジベネフィット」と呼ばれる仮説も、その男女差に関する議論には未だ決着がついていない。例えば、結婚による健康度の上昇は男女差がないとする研究がある一方、女性は妻・母・労働者としての葛藤が男性より大きいことから、仕事を持つ女性にとって結婚はあまり有益でないとする研究もある。本報告では、日本とは異なる社会・文化・経済環境である米国に移動した日系人移民との比較から、日本人女性における婚姻状態と健康との関連を検討する。

2 方法

日本人女性の健康データは日本家計パネル調査（JHPS）の2015年データを使用する。米国日系人女性の健康データは、米国サーベイサンプリング社のモニターに対して2018年に実施されたインターネット調査「日系人健康調査」を使用する。分析対象はそれぞれ21歳から65歳までの女性である。従属変数には主観的健康感（Self Rated Health）を使用した。主観的健康感とは個人の全般的な健康状態を図る指標であり、健康研究において疾病や死亡の指標との関連が確認されている。具体的には、主観的健康感については、「ふだんのあなたの健康状態はどうか」との問いに対して、5つの選択肢（よい、まあよい、ふつう、あまりよくない、よくない）から1つを選ぶことができるようになっている。数値が高いほど主観的健康度が高いとした。婚姻状態には有配偶、無配偶の2カテゴリーを使用した。そのほかに、健康状態に関連があるとされている変数を加えた。年齢、学歴、世帯年収と同居人数、一日の喫煙本、週平均勤務時間である。これらの変数を使用し、日米データでそれぞれ回帰分析を行った。

3 結果

予備分析の結果、日本人女性・日系人女性の両方において、有配偶者は無配偶者よりも主観的健康度が高いことが分かった。また、年齢、学歴、世帯年収、喫煙は両データにおいて健康と関連が見いだせた。つまり、日本人女性・日系人女性ともに、低年齢者に比べて高年齢者は健康度が低く、学歴および世帯年収が高い者ほど健康度が高く、喫煙者は非喫煙者に比べて健康度が低いことが分かった。就労時間に関しては、日本人女性と日系人女性では健康への影響が異なることが分かった。つまり、日本人女性においては、就労時間が長いほど健康度が低いのに対し、日系人女性では就労時間と健康度の間には関連が見いだされなかった。

4 結論

本報告の分析では、日本在住の日本人女性、米国在住の日系人女性の両方において婚姻が健康度の高さと関連していることが分かった。同時に、女性にとって就労することの意味が日本人女性と日系人女性とは異なることが示唆された。つまり、日本に在住する日本人女性にとって就労は健康に対して負の影響を与える一方で、米国に在住する日系人女性にとって、就労は健康に影響を与えない可能性である。今後は、仕事と結婚の両立が女性の健康に影響をあたえるメカニズムの違いを、日本社会と米国社会の比較から解明していく必要があると考えられる。